

# 京都市内遺跡発掘調査概報

平成10年度

京 都 市 文 化 市 民 局

## ごあいさつ

京都は、世界に誇る数多くの歴史遺産に恵まれた大都市であります。市内の埋蔵文化財包蔵地には、年代ごとに幾層にもわたり積み重ねられ、歴史の重みをもつ遺跡が数多く存在致します。

このような埋蔵文化財は、我が国の歴史や文化の成り立ちを知ることができる国民共有の貴重な財産であり、将来にわたって保存すべきものであります。

近年、埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等による開発行為は、これら埋蔵文化財保護に少なからず影響を及ぼしており、先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私達は、その保存と開発との調整を適切に行い、これを後世に伝承していく責務があると考えております。

本報告書は、平成10年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の結果をまとめた概要報告書であります。調査のうち、試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し、発掘調査及び立会調査は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託し実施したものであります。

結びに、今年度の各調査の実施に当たりまして、御理解と御協力を賜りました市民の皆様をはじめ、御指導と御助言を賜りました関係機関の皆様深く感謝申し上げますとともに、本報告書が京都の歴史を知るための一助として、お役に立てていただければ幸いに存じます。

平成11年3月

京都市文化市民局長

坪 倉 譲

## 例 言

- 1 本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した文化庁国庫補助事業による平成10年度の京都市内遺跡発掘調査概要報告である。
- 2 調査地は、下記のとおりである。
  - I 中臣遺跡 山科区勸修寺西栗栖野町44・44-3他
  - II 鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地 左京区鞍馬二ノ瀬町67
  - III 山科本願寺 山科区西野左義長町23-1・23-4
- 3 本書の執筆分担は下記のとおりである。
  - I-1~4 高正龍
  - II-1・3 梶川 敏夫（京都市埋蔵文化財調査センター） II-2・3 近藤 章子
  - III-1~5 吉村 正規
- 4 整理作業および本書の作成には、上記執筆者の他に以下のものが参加した。

出水みゆき、清藤玲子、菅田 薫、能芝妙子、南 孝雄、村上 勉
- 5 写真撮影は、遺構・遺物ともに村井伸也、幸明綾子が担当した。但し、鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地の図10、図版6-1は、梶川敏夫が撮影した。
- 6 本書で使用した遺構の略記号は、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 7 本書で使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に準じた。
- 8 測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用した。調査における測量基準点の設置は、辻 純一、宮原健吾が行った。本書中で使用した方位及び座標の数値は、平面直角座標系VIによる。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。

但し、鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地は、測量基準点がなく、後日GPSによる測量を実施するための仮基準点により調査を実施している。従って本書では、座標値、標高を明示していない。また、報告書抄録の緯度・経度は、地図上にて算出したものであり（ ）で表示した。
- 9 本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画図（山科・勸修寺 縮尺1/2,500）、国土地理院発行京都東北部（縮尺1/50,000）を調整したものである。
- 10 本書の編集は、菅田 薫、能芝妙子が行った。

# 本文目次

## I 中臣遺跡第78次調査

1 調査経過	1
2 遺構	1
(1) 方形周溝墓	1
(2) その他の遺構	2
3 遺物	5
4 まとめ	5

## II 鞍馬二ノ瀬町埋藏銭出土地

1 経緯	7
(1) 調査に至る経緯	7
(2) 発見時の状況	8
2 発掘調査	8
(1) 調査経過	8
(2) 遺構	9
(3) 遺物	9
3 まとめ	11

## III 山科本願寺跡

1 調査経過	18
2 位置と環境	18
3 遺構	18
(1) 土塁	18
(2) 堀	19
(3) 暗渠	19
4 遺物	19
5 まとめ	20
報告書抄録	26

## 目 次

図版 1	中臣遺跡第78次調査 遺構	1	調査区全景
		2	竪穴住居
図版 2	中臣遺跡第78次調査 遺構	1	3号方形周溝墓
		2	4号方形周溝墓
図版 3	中臣遺跡第78次調査 遺構・遺物	1	3号方形周溝墓土器1出土状況
		2	4号方形周溝墓土器2出土状況
		3	土器1
		4	土器2
図版 4	中臣遺跡第78次調査 遺構	1	溝1 (南東から)
		2	溝1 (南西から)
		3	土壌2
図版 5	鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地 遺構	1	調査地遠望
		2	調査前の現状
図版 6	鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地 遺構	1	真笹の上に積まれていた銭貨
		2	SK1
		3	SK1銭貨出土状況
図版 7	鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地 遺物	1	曲物底板
		2	出土銭貨
図版 8	鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地 遺物	1	出土銭貨 表面
		2	裏面
図版 9	鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地 遺物	1	出土銭貨
		2	出土銭貨
図版10	鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地 遺物	1	出土銭貨 表面
		2	裏面
図版11	鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地 遺物	1	出土銭貨 表面
		2	裏面
図版12	山科本願寺跡 遺構	1	調査地周辺航空写真
		2	土塁・暗渠排水口と堀
図版13	山科本願寺跡 遺構	1	土塁 南北断面－断面1－
		2	土塁 東西断面－断面5－
図版14	山科本願寺跡 遺構	1	暗渠細部
		2	暗渠と下層整地の状況

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図	1
図2	遺構平面図	2
図3	3・4号方形周溝墓実測図	3
図4	竪穴住居実測図	4
図5	溝1断面図	4
図6	遺物実測図	5
図7	宮道古墳付近墳墓位置図	6
図8	調査位置図	7
図9	調査地周辺図	8
図10	束状の銭貨と縋縄	9
図11	遺構実測図	10
図12	遺物実測図	11
図13	曲物底板実測図	12
図14	出土銭貨	13
図15	出土銭貨	14
図16	出土銭貨	15
図17	出土銭貨	16
図18	出土銭貨	17
図19	調査位置図	18
図20	調査地周辺図	21
図21	遺構平面図	22
図22	土塁断面1	23
図23	土塁断面2・3・4・5	24
図24	暗渠実測図	25

# I 中臣遺跡第78次調査

## 1 調査経過

山科区勤修寺西栗栖野町で住宅建設に伴う宅地造成が計画された。隣地の第76次調査で一部調査された方形周溝墓(3号)が、当該地にまたがって存在することが知られており、発掘調査を実施することになった。本調査は中臣遺跡第78次調査にあたる。

排土を場内処理する関係上、調査区は調査対象地の北端より周溝墓の推定位置を中心として設定し、1998年10月21日から調査に着手した。調査の

手順は、表土・盛土および江戸時代の地層を重機(バックホー)を用いて排除し、その後は人力により遺構などの掘り下げを行った。また調査の進展に伴い、3号方形周溝墓の西側に別個の周溝墓が存在することがわかり、その規模と溝1の方向の確認のために、南西壁側に2箇所の拡張区を設けた。その間、必要に応じて図面・写真撮影などの記録を行い、11月27日にすべての調査を終了した。



図1 調査位置図(1:5,000)

## 2 遺 構

調査地は畑地として利用されていたが、近年までは竹林であった。畑地への転換時に、竹の根を処理するゴミ穴を掘削しており、大きく攪乱を受けていた。層序はまず表土と竹林の客土層が0.3~0.8m、ついで江戸時代の層が0.1~0.3mあり、地表から0.6~0.9mで無遺物層にいたる。遺構はすべてこの層の上面で検出した。遺構には方形周溝墓2基、竪穴住居1棟、溝1条、土壇2基などがあつた。方形周溝墓は遺構の上部がすでに削平を受けており、盛土はまったく遺存していなかった。なお周溝墓の呼称は、第76次調査から続けて、北東側を3号方形周溝墓、西側を4号方形周溝墓とした。

### (1) 方形周溝墓

3号方形周溝墓(図版2・3, 図3) 調査区北東側で検出した。本周溝墓は第76次調査で報告した2号方形周溝墓と北東側周溝で、4号方形周溝墓とは周溝西隅で重複し、2・4号方形周溝墓の溝が埋没したのちに構築されている。平面形は北東-南西方向に少し広い隅丸の長方形をなす。規模は周溝の内法で北西-南東間約7.1m、北東-南西間は南西側周溝の北東縁が攪乱されており、正確な数値を求めることはできないが、8mほどになると考えられる。周溝は平均して1m前後の幅がある。検出面から溝底までの深さは0.3~0.5mあり、北西側周溝の西隅付近はき

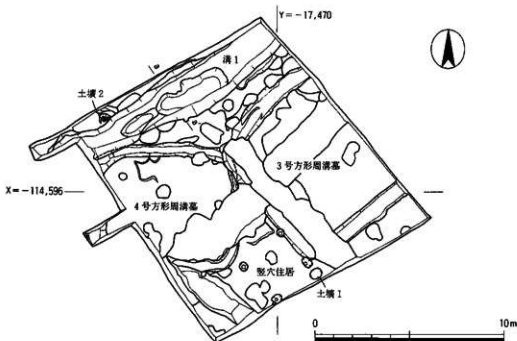


図2 遺構平面図

らに0.1mほど一段深くなっている部分がある。

遺物は、壺形土器（1）が北西溝中央西寄りから正置した状態でほぼ完形のまま出土した。この土器は断面観察の所見から、溝底を少し掘り窪め土器を据えたものと判断される。

周溝墓全体がかなり削平されており、墳丘上の主体部は検出していない。ただし、第76次の調査では周溝内に埋葬部を確認しており、明確な施設や遺物は伴わないが、溝が一段深くなる北西側溝の西隅付近が、土壇墓状の埋葬施設であった可能性が考えられる。

4号方形周溝墓(図版2・3, 図3) 調査区西側で検出した。3号方形周溝墓と北東隅で重複するが、本周溝墓は3号方形周溝墓に先行して構築されている。北側周溝は溝1によって攪乱され、東側から南側にかけては近・現代の攪乱によって大きく損なわれている。また西側周溝は拡張区による部分的な検出にとどまる。平面形は東西に少し広い隅丸の長方形をなすと考えられる。ほぼ正方位方向に主軸があり、規模は周溝の内法で東西約6.7m、南北5.4mある。周溝の幅は北側周溝で0.6~0.75m、西側周溝で1.1mある。検出面から溝底までの深さは、北側周溝が0.3m、西側周溝が0.5mあり、北側周溝の北西隅はさらに0.2mほど一段深くなっている。

遺物は小型の壺形土器（2）が、北側周溝中央東寄りのほぼ溝底から横向きに押し潰された状態で出土した。また北側周溝の東隅には壺形土器の破片（3）が、埋土上位に散在していた。

本墓も墳丘上の主体部は検出していない。また明確な施設は伴わないが、3号方形周溝墓と同様に、溝が一段深くなる北側周溝西隅に、土壇墓状の埋葬施設があった可能性が考えられる。

## (2) その他の遺構

竪穴住居(図版1, 図4) 調査区南側で検出した。遺構の三方は攪乱を受け、規模は不明である。壁溝は検出できなかったが、南東側で一部見られた貼床と支柱穴の存在から竪穴住居と判断



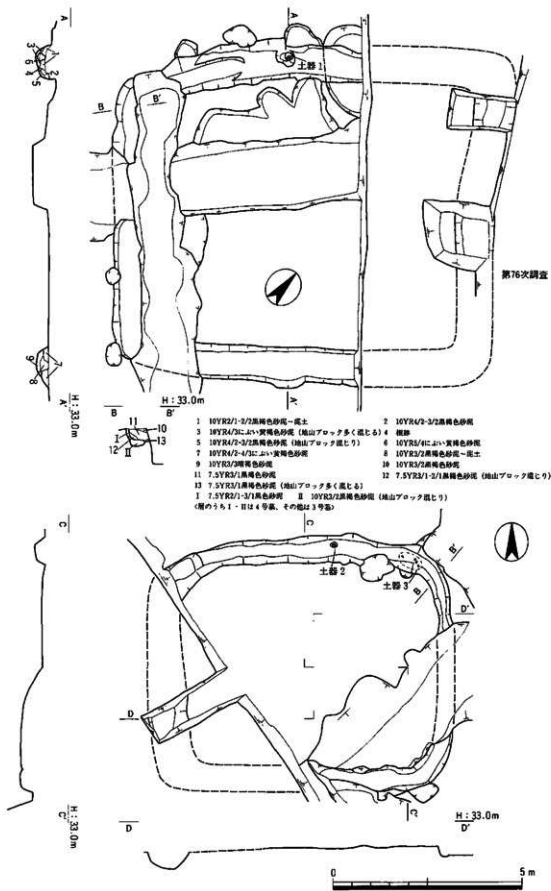


図3 3・4号方形円周溝墓実測図 (上が3号・下が4号)

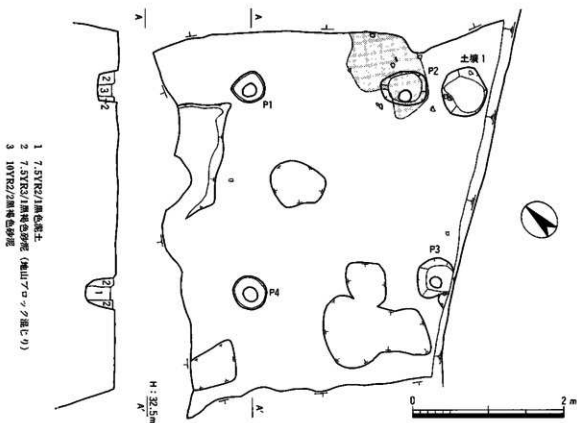


図4 竪穴住居実測図

した。主柱穴は4箇所あり、柱間隔はP1より右回りで、2.06m、2.45m、2.45m、2.66mある。P2の南東にある土壌1は、貯蔵穴の可能性が考えられる。カマドは検出していないが、P2付近に焼土粒および粘土粒の広がりがあり（図4網かけの範囲）、北東側に存在したものが攪乱により削平されたと考えられる。遺物は須恵器の杯や壺底部片、土師器の甎や小型壺片などが床面近くで出土している。

溝1（図版4、図2・5）調査区北西壁に沿って検出した。両端とも調査区外に延び、全体の規模は不明である。溝の最大幅は2.74m、深さが0.6mあり、検出長は13.5mにおよぶ。調査区西端で北西側へ曲がる可能性があったため、拡張区を設けたが、肩部のくずれだけで、溝の方向

に変化はなかった。遺物は検出中にその上面より土師器甎や須恵器壺胴部片が出土したが、溝埋土からは1点の遺物も見られなかった。また溝肩口の土壌2からは須恵器杯・甎片が出土した。

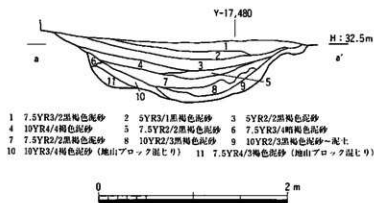


図5 溝1断面図

- |                            |                           |                            |
|----------------------------|---------------------------|----------------------------|
| 1 7.5YR2/1黒色粘土             | 2 5YR3/1黒褐色泥砂             | 3 5YR2/2黒褐色泥砂              |
| 2 7.5YR3/1黒褐色泥砂 (奥山ブロック掘り) | 4 10YR4/4褐色泥砂             | 5 7.5YR2/2黒褐色泥砂            |
| 3 10YR2/2黒褐色泥砂             | 6 7.5YR2/2黒褐色泥砂           | 7 7.5YR3/4暗褐色泥砂            |
|                            | 8 10YR2/3黒褐色泥砂            | 9 10YR2/3黒褐色泥砂～粘土          |
|                            | 10 10YR3/4褐色泥砂 (奥山ブロック掘り) | 11 7.5YR4/3褐色泥砂 (奥山ブロック掘り) |

### 3 遺物(図版3,図6)

今回の調査で出土した遺物は、弥生土器、飛鳥時代の須恵器・土師器、室町時代の土師器、江戸時代後期以降の陶磁器などがある。整理箱で4箱出土した。このうち飛鳥時代の土器類は、7世紀中葉のものが竪穴住居から、7世紀末から8世紀初めのものが土壌2から出土している。ここでは方形周溝墓から出土した土器について概述する。

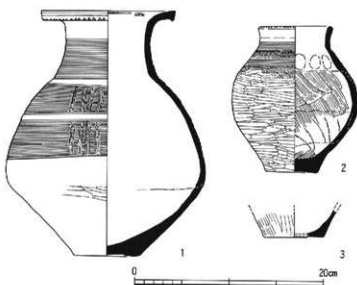


図6 遺物実測図

1は頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部は角度を変えて大きく開く。口縁端部をやや下方へ拡張する。最大径が体部下半にあり、それ以下は角度を変えてすぼむ形態となる。底部は上げ底状である。口縁部内面はハケメ調整、体部外面はナデ調整し、最大径付近より以下は丁寧なヘラミガキを加える。文様は口縁部の外端面に櫛描直線文を施し、下位にヘラによる刻目を巡らす。頸部・肩部・胴部の3箇所にも櫛描直線文を巡らす。櫛原体は11条を1単位とし、それぞれ3巡させ、頸部は下端のみ、その他は上端・下端に沈線をまわす。肩部・胴部の文様帯には、縦方向に4条1単位とした櫛描波状文の4単位からなる短線文を付加するが、器壁はかなり磨耗しており、現状では1箇所のみ観察できる。高さ25.9cm、口径14.2cm、最大径21.1cm、底部径6.9cm。2はやや外傾気味に直立する短い口縁部をもつ。体部の最大径は中位にあり、丸みを帯びる。外面調整は口縁部がナデ、肩部付近以下がハケメ調整で、文様帯下より底部までヘラミガキを加える。内面は口縁部から肩部にかけてナデ、それより下がハケメ調整で、下位より中位にかけて仕上げナデを加える。文様は口縁部の外端面にヘラによる刻目を巡らし、肩部に7条1単位とする櫛描直線文と波状文を交互に2列づつ巡らす。高さ15.3cm、口径7.3cm、最大径13.4cm、底部径5.6cm。3は底部片で、図化はできなかったが、同じ地点から検出した同一個体と考えられる体部片には煤が付着している。体部外面は粗いハケメ調整、底部外面はナデ、内面はオサエとナデが観察される。底部径6.2cm。

### 4 まとめ

今回の調査では弥生時代中期前葉の方形周溝墓2基、7世紀中葉の竪穴住居1棟、7世紀以前と考えられる大型の溝1条、7世紀末から8世紀初めの土壌1基などを検出した。溝の性格は不明であるが、古墳の周溝の可能性を考えて調査を進めた。調査区に近接して、後期古墳と推定される宮道列子墓(宮道古墳)があり、宮道古墳を隔てて反対側の第1次調査では石室をもつ径6.2

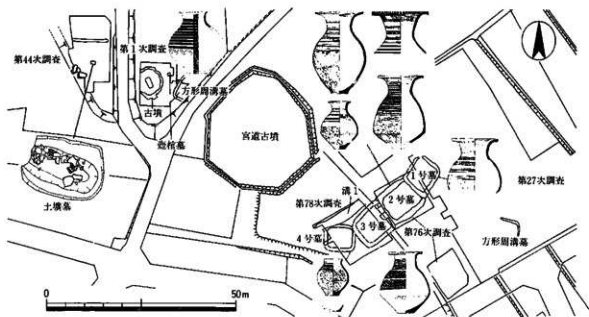


図7 宮道古墳付近墳墓位置図

mの小型円墳を検出しているためである。また少し離れるが、西へ約150mの第59次調査でも古墳を検出しており、付近一帯は、中臣遺跡の中でも比較的多くの古墳が確認される地点である。この溝を方墳の周溝とみて、南西側で溝が北西側に折れることを予測し約2m拡張区を設けたが、方向に変化はなく、古墳の周溝であるかどうかを結論づけることはできなかった。

方形周溝墓は今回の調査によって連接する状態で4基確認したことになる。周辺地域ではこの他に第1次調査で方形周溝墓1基、壺棺墓1基、第27次調査で方形周溝墓1基、第44次調査で土墳墓1基が検出されており、弥生時代中期前葉を中心とした時期の墓域を形成している。1～4号墓は、周溝内から出土した土器からみて、4号→2号→1号→3号の順に築造されたと考えられる。4号墓から出土した土器2は、弥生時代中期前葉（畿内第II様式併行）に位置し、これを前半と後半に二分すれば、前半に位置付けることができる。2号墓の土器はその後半に位置し、やや古相を呈する土器と新相のものが混じる。前者を築造時、後者を周溝内埋葬が行われた時期と想定している。1号墓は、2号墓新相の土器とほとんど時期差はない。3号墓の土器1は中期中葉、畿内第III様式の前半初頭まで下ると考えられる。なお3・4号墓には周溝の中に一段深く掘り窪められた箇所があり、第76次調査と同様に周溝内における埋葬施設の可能性を考えた。いま一つ決め手にはかけるが、これが正しければ、中臣遺跡におけるこの時期の方形周溝墓の特徴として捉えることができるだろう。

以上のように本地域は弥生時代中期前葉や古墳時代後期の墓域を構成する重要な地域であり、今後も綿密な調査が必要である。

#### 参考文献

- 『中臣遺跡発掘調査報告』 京都府立洛東高等学校郷土研究クラブ 1971年（贈写版）
- 『中臣遺跡発掘調査概要 昭和55年度』 京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 『中臣遺跡第76次調査』京都市内遺跡発掘調査概報 平成9年度 京都市文化市民局 1998年

## II 鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地

### 1 経 緯

#### (1) 調査に至る経緯

1998年1月28日、自宅裏で石垣工事を行っていた京都市左京区鞍馬二ノ瀬町の宮坂篤芳氏宅敷地裏から大量の銭貨が出土した。

出土した銭貨は、石垣工事中に法面上方に生えていたシュロの木の根を起して偶然発見されたもので、最初の発見者は地元在住で工事作業を担当しておられた足立芳太郎氏と、地主でもある宮坂篤芳氏並びに夫人の三千枝さんの3名である。

同年2月4日の午後、三千枝さんから大量の銭が出たとの通報を受けて京都市埋蔵文化財調査センターと(財)京都市埋蔵文化財研究所の職員4名が現地へ到着した時点では、出土した銭貨は埋蔵されていた穴から殆どが取り出され、真鍮の上に積み上げられた状態で、一見して相当量の埋蔵銭と思われる。積まれていた銭の中には、銭貨の容器とみられる曲物の底板らしい薄い木片のほか、土師器の細片なども少量混じっていた。しかし、槽銭で埋蔵されていたかどうかを含めて、埋蔵状態はまったく不明であった。だが、真鍮の上に積み上げられた銭貨の中には、棒状に繋がり、銭穴に切れた縋縄が残っているものもあったことから、銭貨は槽銭の状態で埋蔵されていたと思われる。銭貨が出土した穴の部分はすでに石垣工事が施工され、一部は埋め戻し作



図8 調査地位位置図 (1:50,000)



図9 調査地周辺図

上方に家屋があり、その北裏手にはすぐ山裾が迫る。出土地点は、宮坂家と北隣との間を流れる小さな谷川を越えた北側、隣家の既存木造家屋のすぐ裏手の軒下部分に当たる。

足立さんと三千枝さんの記憶では、1月28日に斜面に石垣を積むため、上方にあったシュロの根を起こしていたら、子供の頭大の河原石を3個見つけ、その石を除いたら中に古銭が沢山あるのを発見、数日かけて穴から古銭を掘り出したとされる。

工事を施工されていた足立さんによると「法面の上方にシュロの木があったので、その根を起こしていたら古銭が沢山出てきた。法面には人頭大の石が数個あって、石は横から蓋状になっており、その中に銭が沢山入っていた。銭は木箱状の入れ物に入っていたように思われる。また、底部分は斜めで、一番下から底板状の木片が出てきた。底板は銭の上にほうり上げている」と話されている。

## 2 発掘調査

### (1) 調査経過

今回の調査の主目的は、銭貨の埋蔵状態の確認であるため、最小限の調査区を設定した。出土場所とされる箇所には約2mの高さに空積みで石垣が組まれており、安全を確保するため、石垣の一部を上方より解体しながら裏込めの土・石を取り除き、石垣が崩落しないように前面から見

業が行われており、この段階で調査を実施するのは困難と判断した。写真撮影と簡易な現場記録をとった後、放置されていた大量の銭貨をそのまま雨曝ししておくわけにもいかないため、地主の了解を得て銭貨全部を遺物袋に分けて入れ、センターへ持ち帰って整理を行うことにした。その結果銭貨の枚数は破片を含めて38,148枚、重さは138.5kgあった。

その後、地主の宮坂さんと話し合いを行い、調査後に石垣を元に戻すことを条件に発掘調査実施の了承が得られたことから、1998年11月9日から16日まで発掘調査を行った。

### (2) 発見時の状況

銭貨が出土した宮坂氏宅は、府道に面した北側にあつて、山麓斜面地を造成し、道路に面して高く石垣を積んだ

てV字形になるよう掘下げを行った。掘下げ作業はすべて人力によって行い、排土・石等は、調査終了後、石垣を組み直す際に用いるとのことで東側の斜面に土嚢袋につめて確保しておいた。

## (2) 遺構 (図版6, 図11)

現地表は東から西、北から南への斜面となっている。

基本土層は盛土、表土、旧表土、褐色砂泥層、0.2~0.5m大の礫を多く含む褐色砂泥層、にぶい黄褐色泥砂層と、その下層に地山と考えられる黄褐色混礫泥砂層が堆積する。にぶい黄褐色泥砂層は、後述する土壌SK1の埋土と思われ、ここから銭貨が出土した。

黄褐色混礫泥砂層上面で、南北0.76m、東西0.54mの土壌SK1、径0.3mの土壌SK2を検出した。

SK1は、銭貨発見時にスコップ等で銭貨を掘り上げられた跡と推定される地点で検出した。

ここでは、銭貨が納められていた曲物を据えた痕跡は確認できなかったが、埋土とみられるにぶい黄褐色泥砂層からは銭貨がまとめて出土した。

SK2は形状からみれば、曲物を据えるのには最適であると思われたが、その痕跡は確認できず、埋土からも銭貨は出土しなかった。

## (3) 遺物 (図版8・9・10・11, 図10・12・14・15・16・17・18)

ここでは、発掘調査で出土した遺物についてのみ概要を述べる。

発掘調査で出土した銭貨の枚数は314枚、重量は1.111kgあり、解読可能な銭貨の種類は37種ある。初鑄の最も古いのは「開元通寶」



図10 束状の銭貨と罽繩

(621年・唐)で、背に「京」字と月印のあるもの、月印だけのものなどがある。また、新しい銭貨では「咸淳元寶」(1265年・南宋)がある。にぶい黄褐色泥砂層からは23枚の銭貨がまとめて出土しており、その他は石垣裏込土中や攪乱された土中に散在していた。比較的良好な状態のものが多く、罽繩の痕跡を溜めるものもあり、保存状態の良さをうかがわせる。

土器は石垣工事により土層が攪乱されているため、堆積層からの明確な出土状況は把握できなかったが、土師器皿、須恵器椀、常滑の甕、亀山系の甕、瓦器などが出土した。

土師器皿(1)は復原口径7.2cm、器高1.5cmで底部は欠損しているが、底部中心に向い上がり気味である。赤色系で、体部は外反し、器壁は薄い。口縁部はヨコナデ調整、体部の内外面は指オサエで、指圧痕が残る。室町時代のものである。また1点だけであるが、平安時代前期(9世紀後半)の須恵器椀(2)の高台部分が出土している。緑釉を施す前の素地と考えられる製品で、内外面ともにミガキがあり、削り出し蛇ノ目高台である。底部は火ぶくれをおこして歪んでおり、

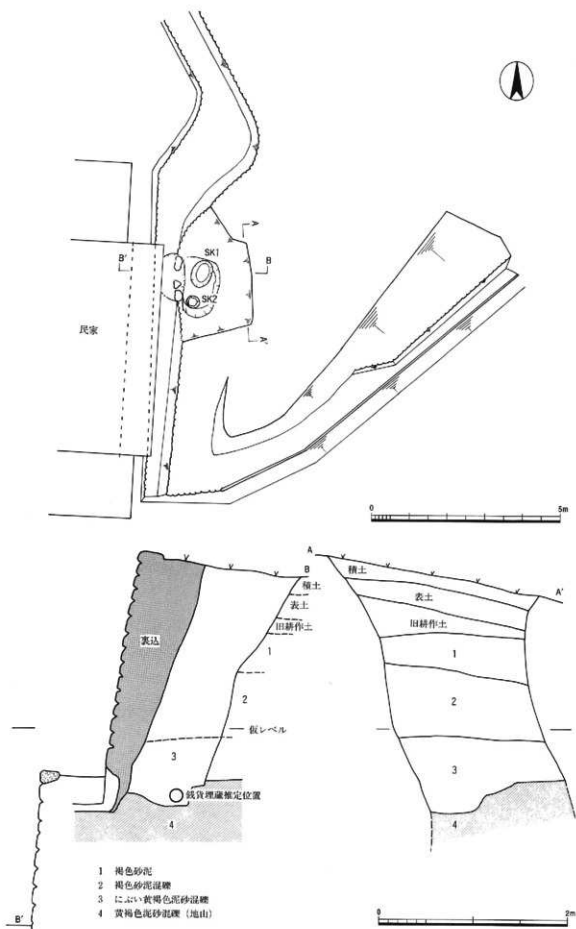


図11 遺構実測図



窯跡などからの出土品でよく見られるものと同質の遺物である。

そのほか、常滑産の甕の一部と亀山系と思われる甕があり、亀山系(3・4)は口縁と体部の一部で、口縁部は外反し、端部は平坦な面をもつ。体部外面は格子タタキで、内面はナデを施す。胎土はやや軟質で、焼成は甘い。

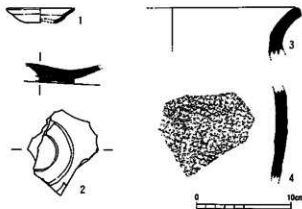


図12 遺物実測図

### 3 まとめ

今回の確認調査では、発見時に掘り返された経過もあり、埋蔵銭貨に関する遺構を明確にすることはできなかった。しかし、室町時代の遺物の混入があったことや、初鑄が1265年という出土銭貨からも、銭貨は13世紀から14世紀頃に埋められたものと推定できる。

当該地は周知の遺跡には当てはまらない場所であった。直線距離にして25m程北東側の山中には「二ノ瀬廃寺」と称される遺跡が存在し、現在も高さ2～3mの石垣が残存している。この遺跡は現在までに緻密な調査も行われておらず、沿革などもまったく不明で、今回発見した埋蔵銭貨との関係については、遺跡が寺院跡であるかどうかを含めて今後の検討課題といえる。また、1点ではあるが窯跡の存在をうかがわせる須恵器碗の出土からも、改めて周辺での調査の必要性を感じさせる結果となった。

鞍馬二ノ瀬町から出土した銭貨は、当初発見時が38,148枚、その後実施した発掘調査で314枚出土しており、総数は38,462枚(重さ146.5kg)となった。そのほか工事の時点で排土中などに散逸した銭貨を含めると、埋蔵総数は4万枚前後はあったものと推定される。

銭貨は今のところ、島銭や模鑄銭以外は国産のものは見つかっておらず、大半が中国から輸入された銭貨と思われる。現在までに確認できた銭貨は、最古の銭貨が西暦24年の「五銖銭」、最新は時代不明の島銭・模鑄銭を除くと、1265年の「咸淳元寶」までで、合わせて57種類となる。また曲物は、掘り出した人の証言から、銭貨を取り出した時に底とみられる場所から出てきたとのことで、復原直径は34cm程のやや歪んだ円形で、全体の半分程度が残っていた。この曲物の底板表面部分には銭貨の圧痕が残っていることから、銭貨はこの曲物に入れて埋蔵されていたと判断した。曲物の銅板は確認されていないが、底板以外に曲物の蓋の破片の可能性のある木片が1片ある。現在のところ銭貨の容器である曲物は一つとみられ、発掘調査でもこのほかの埋蔵銭遺構は発見していない。

銭貨出土場所の土地所有者である宮坂篤芳・三千枝御夫妻には、銭貨発見の連絡や発掘調査への御理解と協力、また出土銭貨を一括して京都市への寄付を英断して頂くなど、埋蔵文化財の保護に深い理解と多大な協力を頂いた。また発見者の一人でもある足立芳太郎氏には、工事途中にもかかわらず、詳しい発見情報の提供や、後日石垣を外しての発掘調査および復旧工事に種々の

協力を頂いた。そのほか地元の左京区役所神戸出張所職員の方々、地元二ノ瀬区長の柴田 耕氏にも協力を得た。兵庫紙幣史編纂所代表永井久美男氏、兵庫県教育委員会渡辺 昇氏、京都府教育委員会肥後弘幸氏からも御教示を頂いた。記して謝意をしたい。

最後に埋蔵銭貨について、永井久美男氏からはおおよその銭貨観察結果から、埋蔵時期は西暦1340年前後の可能性があるとの指摘を受けているが、今後、銭貨整理作業が進行すれば、より明らかになってゆくものと考えられる。

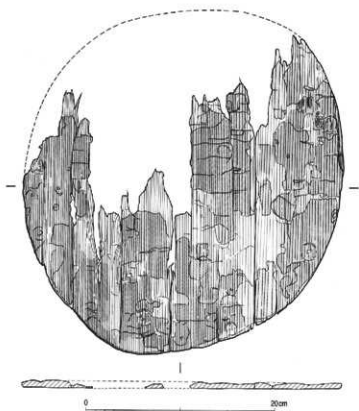


図13 曲物底板実測図

#### 参考文献

- 『京都市の地名』 平凡社 1979年  
 『史料京都の歴史』 第8巻 左京区編 京都市 1985年  
 竹村俊則『昭和京都名所圖會』 3 洛北 巖々堂 1982年  
 鈴木忠司ほか『平安京左京八条三坊七町』 京都文化博物館（仮称）調査研究報告第1集（財）京都文化財団 1988年  
 永井久美男『日本出土銭貨総覧』 兵庫埋蔵銭調査会 1996年



1 五銖 (24)



2 五銖 (581)



3 開元通寶 (621)



4 開元通寶 (621)  
【背上月】



5 開元通寶 (621)  
【背下月】



6 貞元重寶 (758)



7 開元通寶 (845)  
【背京·下月】



8 開元通寶 (845)  
【背典】



9 貞元元寶 (919)



10 順通元寶 (955)  
【背一】



11 唐國通寶 (959)  
【真書】



12 開元通寶 (960)



圖14 出土錢貨

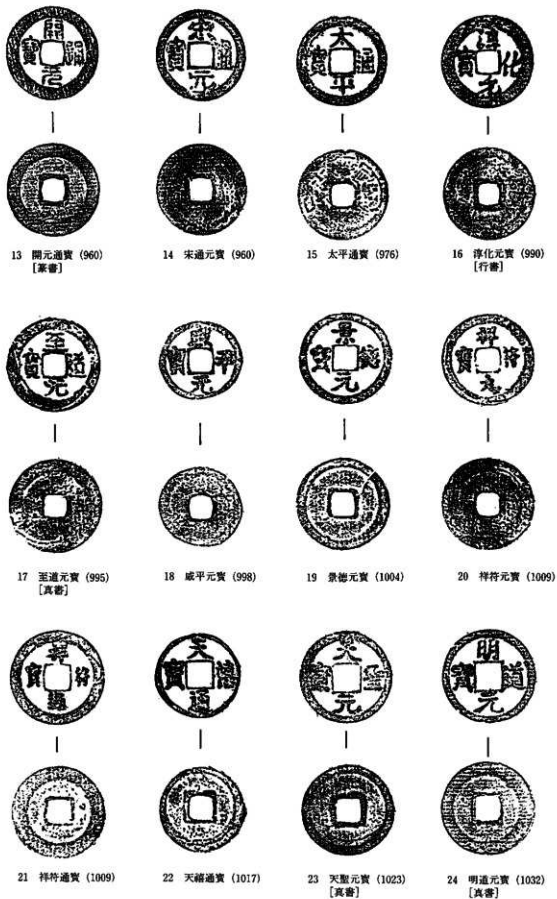


图15 出土錢貨



25 景祐元寶 (1034)  
[真書]



26 皇宋通寶 (1038)  
[篆書]



27 至和元寶 (1054)  
[篆書]



28 嘉祐通寶 (1056)  
[真書]



29 治平元寶 (1064)  
[篆書]



30 治平通寶 (1064)  
[篆書]



31 熙寧元寶 (1068)  
[真書]



32 元豐通寶 (1078)  
[篆書]



33 元祐通寶 (1086)  
[行書]



34 紹聖元寶 (1094)  
[行書]



35 元符通寶 (1098)  
[篆書]



36 聖宗元寶 (1101)  
[行書]

圖16 出土錢貨

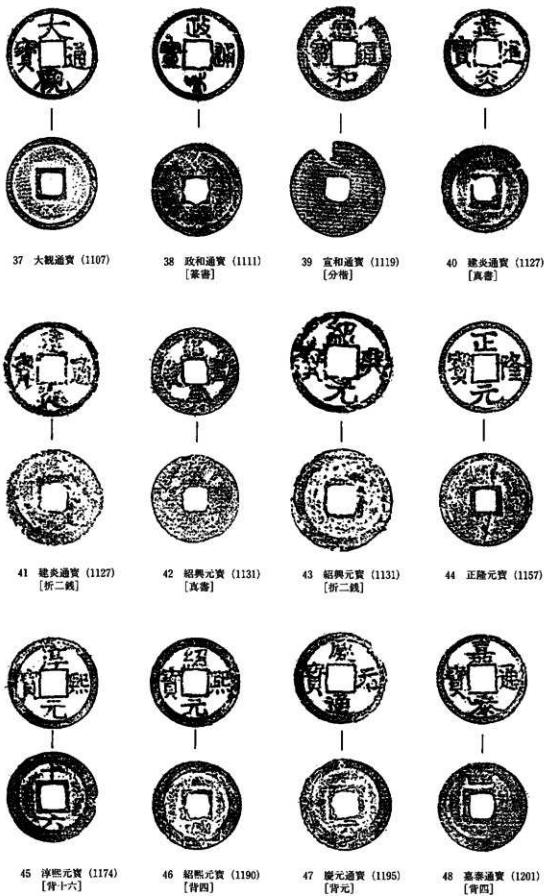


圖17 出土錢貨



49 嘉定通寶 (1208)  
【背九】



50 紹定通寶 (1228)  
【背五】



51 端平元寶 (1234)  
【背元】



52 嘉熙通寶 (1237)  
【背元】



53 淳祐元寶 (1241)  
【背五】



54 皇宋元寶 (1253)  
【背六】



55 咸淳元寶 (1265)  
【背元】



56 島錢・淳化元寶  
日本(中世)



57 模鑄錢  
日本・(中世)



58 模鑄錢



59 模鑄錢

图18 出土錢貨

### Ⅲ 山科本願寺跡

#### 1 調査経過

調査地は京都市山科区西野左義長町に所在する。今回の発掘調査に至るまでに当該地に接して2回の調査が行われており、それぞれに重大な発見があった。その結果、平成8年度の調査では埋甕と焼土が、平成9年度の調査では土塁と暗渠の入口が明らかにされた。

調査対象地は、山科本願寺「御本寺」の西南コーナー一部にあたると思われる。敷地は約620㎡、調査面積は505㎡である。調査対象となる土塁は竹林と雑木に覆われていた。調査は、土塁・堀に主眼をおき調査区を設定した。1998年8月17日から開始し、必要に応じて実測・写真撮影などを行い、11月9日調査を終了した。

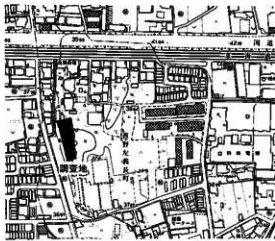


図19 調査地位置図 (1:5,000)

#### 2 位置と環境

現在、山科本願寺跡は、土塁の一部と蓮如上人の廟所、光熙寺境内に遺存する南殿跡の庭園のみを残して、水田・住宅となり、その面影はない。特に、国道と新幹線によって南北に分断されている地点では、土塁以外に地表上に残存する遺構はない。

山科本願寺は、文明十五年(1483)から天文元年(1532)にかけて、本願寺8世蓮如と、京を追われた門徒によって創建された寺院である。この地は、北陸・東海地方からの京への入口にあたり、また宇治や奈良への分岐点でもあった。そのため物流の中心となり、それらの担い手である門徒が集住するようになり、本願寺を中心とした寺内町として発展した。近江・北陸・東海地方は真宗の勢力圏となっていくが、布教活動の拡大は、山科に本拠地があったため可能になったものと思われる。天文元年頃には、日蓮宗との関係が悪化したため、各寺院を中心として、門徒の商工業・惣百姓・武士であった人々は、集団で防護につとめる必要にせまられ、寺内町の成立が促進された。当地においても8町の寺内町を形成している。

#### 3 遺構

##### (1) 土塁 (図版12・13, 図21・22・23)

平成9年度の調査で東半分がすでに削られており、残存部は幅8.8m、高さ5.0m、長さ約43mであった。



断面1 土塁の西南コーナー部にあたり、南北方向の縦断面である。土塁断面を観察すると、土塁の構築順序は、東西方向の土塁が先行し、ついで南北方向土塁が造成された事が明らかになった。南北方向の土塁構築土は、砂礫を主体として、南から北へ流れる様な堆積状況になっている。この最下層からは、中世土師器の小片が少量確認でき、土塁築造直前の遺物ではないかと思われる。土層は周囲の堀を築造した際に排出された土を、次々に盛り上げたものと思われる。その際、砂礫と粘土質が互層になる様にし、かなり雑に積み上げて仕上げられている。西面土塁は暗渠部分で東に弯曲していたため、この部分は開発により切り取られていたのではないかと考えられていた。しかし調査の結果、排水口の外に焼土が広がっており、当初より弯曲していたことが確認できた。

断面5 土塁南側の基底部を地山まで確認してみるとコーナー部が張り出した形となり、造り出し状にふくらんでいることが判明した。現状では、基底部は地表下に埋まり、地上では観察できないが、土塁として西側の隣地にまで広がっている。

## (2) 堀 (図版12, 図21・23)

断面2 南北方向の堀底部から土塁の頂までの横断面(約8m)で、調査区の北壁断面である。堀の最低部は、堅い砂礫層まで掘られ、湧水が激しい。暗渠から流れた土や焼土・灰が排水口部から底部に広がって残っていた。最終的な堀の埋め立ては比較的新しく、3段階を経て行われていた。土塁そのものの残存状況は極めて悪く、基底部の整地層だけが観察できた。遺物としては江戸時代の陶器があるのみで、中世のものはなく、溜池に改修された時に底ざらえされたものと思われる。

断面3 東から西に流れる泥土の堆積のみで、山科本願寺頃の土層の堆積は見られなかった。

断面4 調査区南側、土塁の掘部から一部堀にかけて掘り下げを行った。地山層と考えられる堅い砂礫層になると、急に湧水が増える。2段状になっている堀は、さらに南側まで広がっていると思われるが、現状では道路下となり、わずかに肩口のみしか確認できなかった。最下層の泥土中に江戸時代の陶器片が混入し、それ以前の遺物はまったく出土しなかったことから、江戸時代前期頃に堀が改修されたものと思われる。

## (3) 暗渠 (図版14, 図24)

南北の土塁に直行するように造られ、現地表面から深さ0.3mのところ検出した。暗渠は底石・鋼石・蓋石から構成され、幅0.75m、高さ0.5m、空洞部幅0.3m、同深さ0.25mを測り、長さ6.5mにわたって検出した。平成9年度の調査と合わせると、11.8mの長さとなる。暗渠は、東から西の堀へ向かって平均5度の勾配をもち、排水口付近では、15度になる。石材は丸味のある花崗岩の川原石を用いている。堀への排水口付近では、暗渠の石が抜き取られて土砂で埋まっていたが、中央部では空洞となっていた。

## 4 遺物

堀からは、江戸時代以降の土器類と木片が少量出土している。土塁の基底部から古墳時代の

須恵器などが出土したが、当該期の遺物はいずれも小片で時期決定にいたるものではない。また、暗渠部下層の整地層からは本願寺創建当時の土師器皿が出土したが、薄い灰層の上面にあったことから、整地工事中に捨てられた遺物であろう。

## 5 まとめ

平成9年度の調査で検出した土壘暗渠の全容を確認し、土壘コーナ一部構築方法を明らかにすることができた。また、土壘と暗渠は築造当初から計画的に造られたものではないことが判明した。土壘頂部から、約2mほど下った地点で造成が行われており、一時期ここに土壌が存在した。その後土壘が築かれ、さらにこれを断ち割る形で暗渠が造られたことになる。これは暗渠の出口付近に土砂がたまつたため、いったん出口より3分の2部分まで再び掘り下げて暗渠の蓋を開け、流入土を除去し、その後暗渠の上面を粘土で巻いて補強したのちに埋め戻したものと考えられる。また、現地表面を2m下げると湧水があるなど、土地条件が悪い所であることも明らかになった。そのためかなりの盛土を行った後、土壘が築かれたものと思われる。当調査区は御本寺の南西隅にあたり、拡張された寺内町とその中心部を防御すべき必要性にせまられて、条件の悪い土地にもかかわらず、土壘と堀を造成しなければならなかったであろう。

調査地西に接する駐車場はオチリと呼ばれており、約20年前まで残存していた溜池の跡地で、山科本願寺の南西部の堀を利用して造られたものであろう。当地点においては古岡などにみられる「Y」字形の細長い溜池の南端付近をさすものと思われる。かつての溜池には湧水があったとされているが、当調査区においても確認する事ができた。平成8年度の調査や今回の調査では、御本寺内の水を寺外へ排水するための施設をそれぞれ確認している。またこのオチリが天文元年の山科本願寺焼打の際に、侵入口となった「水落」の有力な候補地として推定するだけに止まった。

近隣での既往の調査結果は、いずれも本願寺焼き打ちの状況をよく残していた。今回の調査では、寺内町からの水を流し出す暗渠施設、および御本寺の南西端付近の防御施設としての土壘と堀を明らかにする事ができた。

## 参考文献

『戦国の寺・城・まち』山科本願寺・寺内町研究会編 法藏館 1998年

森蘊「庭園」『日本史小百科』19 近藤出版社 1984年

岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集  
国立歴史民俗博物館 1985年

西川幸治「都市史のなかの中世寺内町」同上

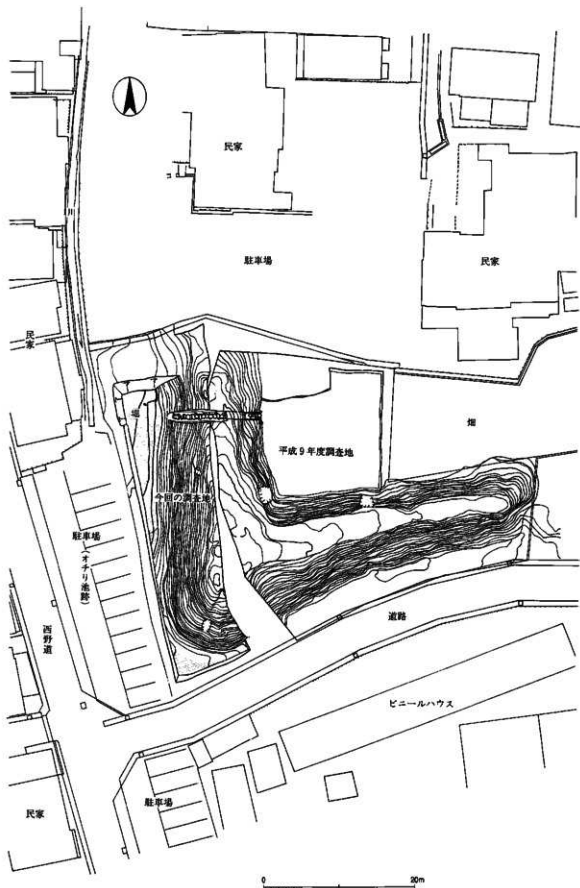


図20 調査地周辺図

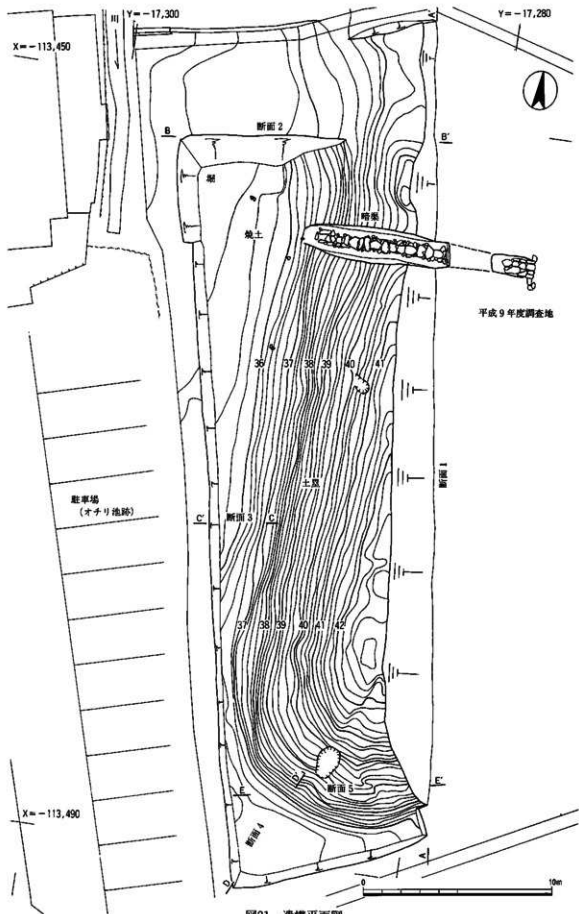
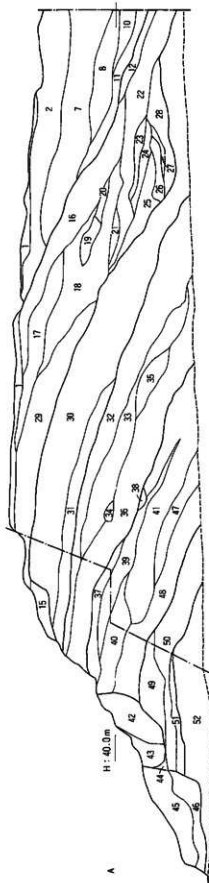


図21 遺構平面図



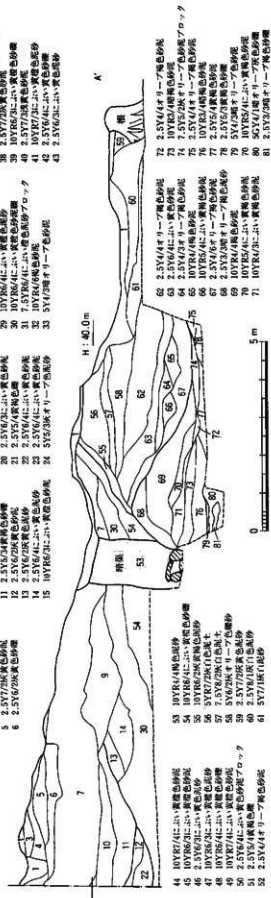
- 34 7.5YR6/3に多い褐色砂泥
- 35 10YR6/3に多い黄褐色砂泥
- 36 2.5Y5/4黄褐色砂
- 37 2.5Y7/2黄褐色砂
- 38 2.5Y7/2黄褐色砂
- 39 10YR6/3に多い黄褐色砂
- 40 2.5Y7/2黄褐色砂
- 41 10YR7/3に多い黄褐色砂
- 42 2.5Y6/4に多い黄褐色砂
- 43 2.5Y6/3に多い黄褐色砂

- 25 2.5Y5/3黄褐色泥
- 26 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
- 27 5Y5/3オリーブ褐色泥
- 28 2.5Y6/3黄褐色砂
- 29 10YR6/4に多い黄褐色砂
- 30 10YR6/4に多い黄褐色砂
- 31 7.5YR6/4に多い黄褐色砂
- 32 10YR4/6黄褐色泥
- 33 5Y4/3オリーブ褐色砂

- 16 10YR6/3に多い黄褐色砂泥
- 17 10YR7/1灰白色砂泥
- 18 2.5Y7/2灰黄色砂泥
- 19 2.5Y6/3黄褐色砂
- 20 2.5Y6/3黄褐色砂
- 21 2.5Y5/4黄褐色砂
- 22 2.5Y6/4に多い黄褐色砂
- 23 2.5Y6/4に多い黄褐色砂
- 24 5Y5/3オリーブ褐色砂

- 7 10YR6/3に多い黄褐色砂泥
- 8 10YR6/4に多い黄褐色砂泥
- 9 2.5Y6/4に多い黄褐色砂
- 10 2.5Y7/2黄褐色砂
- 11 2.5Y6/3黄褐色砂
- 12 2.5Y6/2黄褐色砂
- 13 2.5Y6/2黄褐色砂
- 14 2.5Y6/4に多い黄褐色砂
- 15 10YR6/3に多い黄褐色砂

- 1 灰土
- 2 7.5YR7/6褐色砂泥
- 3 7.5YR7/4に多い褐色砂泥
- 4 7.5YR7/4に多い褐色砂泥
- 5 7.5YR7/4に多い褐色砂泥
- 6 2.5Y6/2黄褐色砂



- 72 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
- 73 10YR6/3に多い黄褐色砂泥
- 74 2.5Y5/3オリーブ褐色砂泥
- 75 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
- 76 10YR4/4黄褐色砂泥
- 77 2.5Y5/4黄褐色砂泥
- 78 2.5Y5/3黄褐色砂泥
- 79 5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 80 5Y4/4に多い黄褐色砂泥
- 81 2.5Y5/3オリーブ褐色砂泥

- 62 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
- 63 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 64 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
- 65 10YR4/4黄褐色砂泥
- 66 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥
- 67 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥
- 68 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 69 10YR4/4黄褐色砂泥
- 70 10YR4/4に多い黄褐色砂泥
- 71 10YR6/3に多い黄褐色砂泥

- 53 10YR4/4黄褐色砂泥
- 54 10YR6/4に多い黄褐色砂泥
- 55 10YR6/2黄褐色砂泥
- 56 5YR7/2黄褐色砂泥
- 57 5YR7/2黄褐色砂泥
- 58 5Y6/2オリーブ褐色砂
- 59 2.5Y7/2黄褐色砂
- 60 2.5Y7/2黄褐色砂
- 61 5Y7/1灰白色砂泥

- 55 5Y5/3黄褐色砂
- 56 5Y5/3黄褐色砂
- 57 5Y5/3黄褐色砂
- 58 5Y5/3黄褐色砂
- 59 5Y5/3黄褐色砂
- 60 5Y5/3黄褐色砂
- 61 5Y5/3黄褐色砂

図22 土層断面1

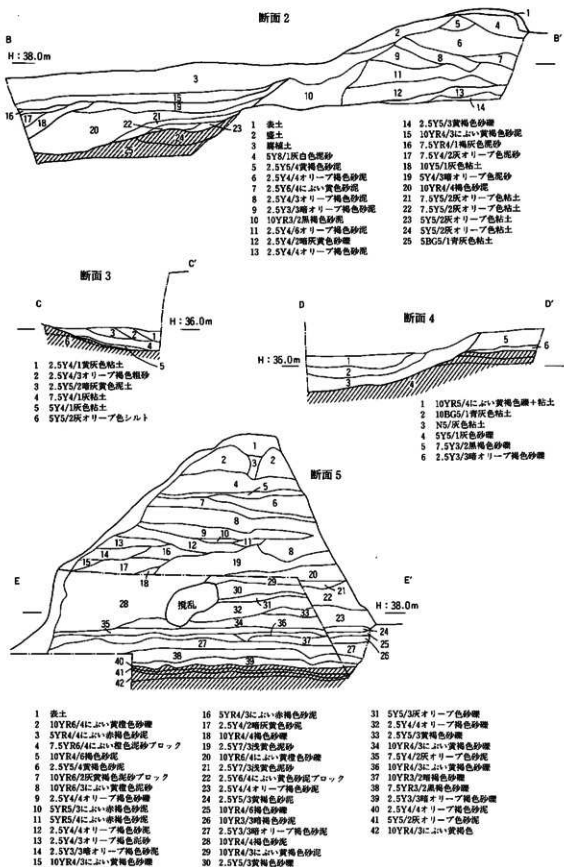


図23 土層断面 2・3・4・5

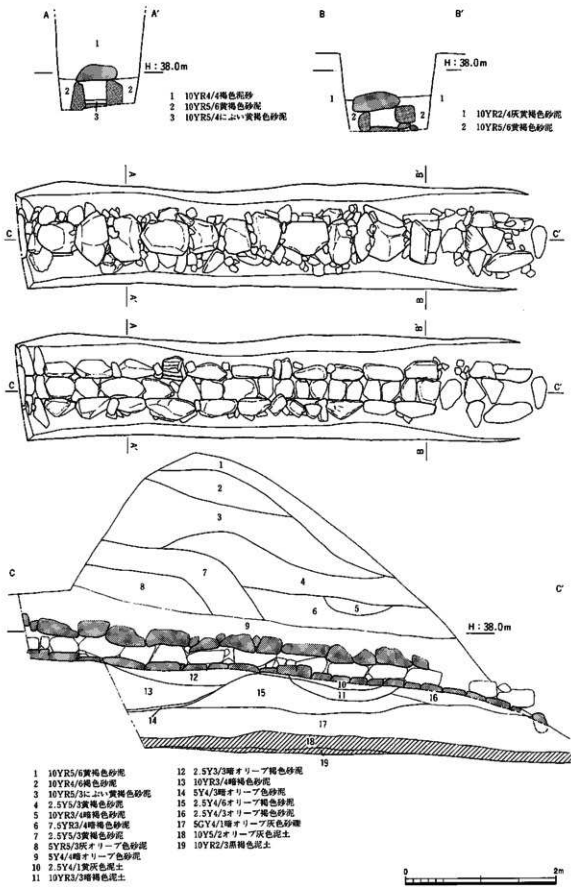


図24 暗渠実測図

## 報告書抄録

ふりがな	きょうとしなにいせきほくつちようきがいはう							
書名	京都市内遺跡発掘調査概報 平成10年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	高正隆・横川敏夫・近藤章子・吉村正親・能芝妙子・菅田憲							
編集機関	京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1 TEL075-415-0521							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-0925 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488 TEL075-222-3108							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中野遺跡 第78次	京都市山科区 鞍馬寺西米畑野町44-3他	26100		34度 58分 00秒	135度 48分 31秒	1998/10/21～ 11/27	177㎡	住宅建設
鞍馬二ノ瀬町 埋蔵線出土地	京都市左京区 鞍馬二ノ瀬町67	26100		(35度) (05分) (44秒)	(135度) (45分) (58秒)	1998/11/9～ 11/16	5㎡	確認調査
山科本願寺	京都市山科区 左衛門町23-1他	26100		34度 58分 37秒	135度 48分 40秒	1998/8/17～ 11/9	505㎡	駐車場造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中野遺跡 集積跡	墓域跡 集積跡	弥生時代 飛鳥時代	方形周溝墓 竪穴住居	弥生土器 須恵器・土師器				
鞍馬二ノ瀬町 埋蔵線出土地		室町時代		銭貨				
山科本願寺跡	寺院跡	桃山時代	土塁・石組み噴渠					



# 圖 版



1 調査区全景 (北西から)



2 竪穴住居 (北東から)



1 3号方形周溝墓（北西から）



2 4号方形周溝墓（北東から）



1 3号方形周溝墓土器1出土状況(南西から)



2 4号方形周溝墓土器2出土状況(東から)



3 土器1



4 土器2



1 溝1 (南東から)



2 溝1 (南西から)



3 土坑2 (北東から)



1 調査地遠望（北から）



2 調査前の現状（北から）



1 墓塚の上に積まれていた銭貨



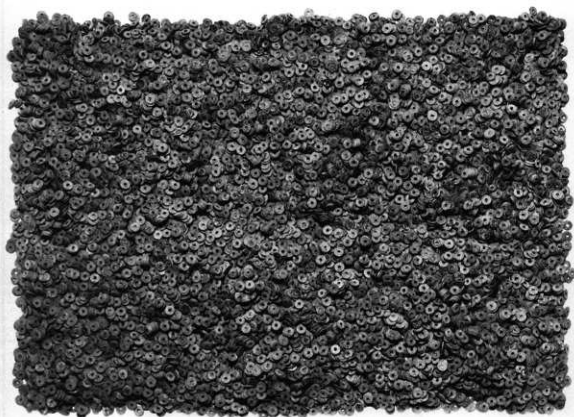
2 SK1 (北から)



3 SK1 銭貨出土状況

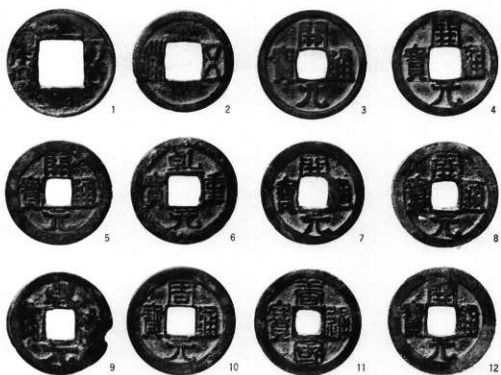


1 曲物底板

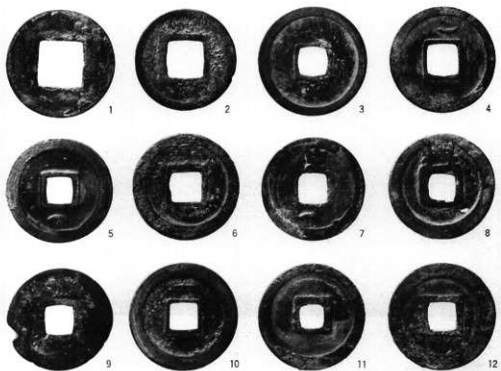


2 出土銭貨

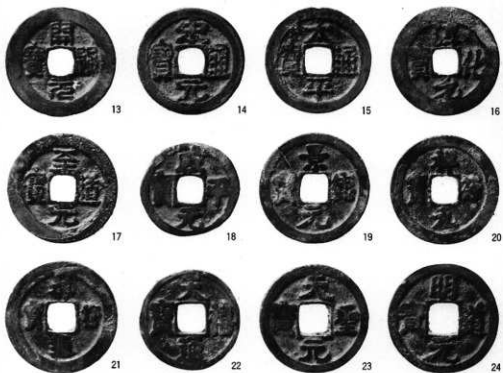




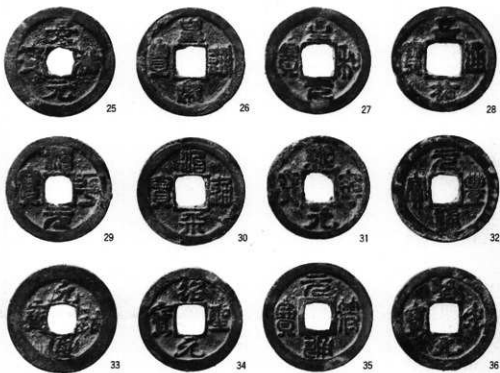
1 出土銭貨 表面



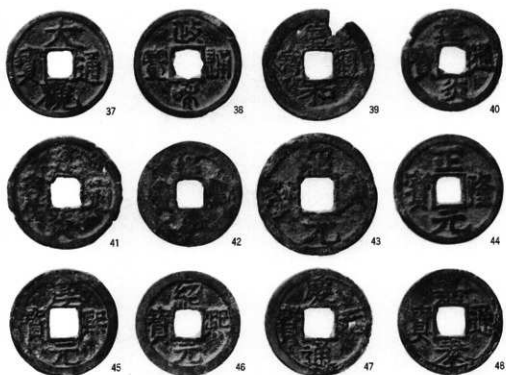
2 裏面



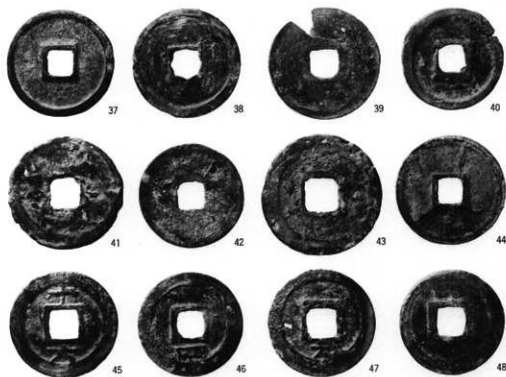
1 出土錢貨



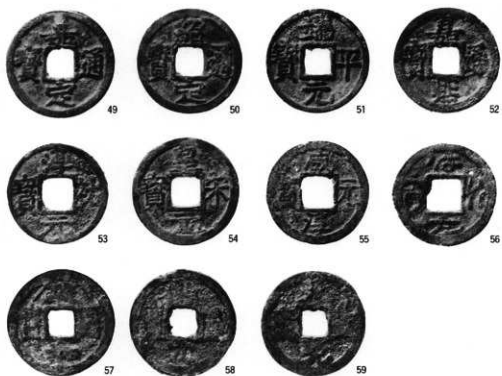
2 出土錢貨



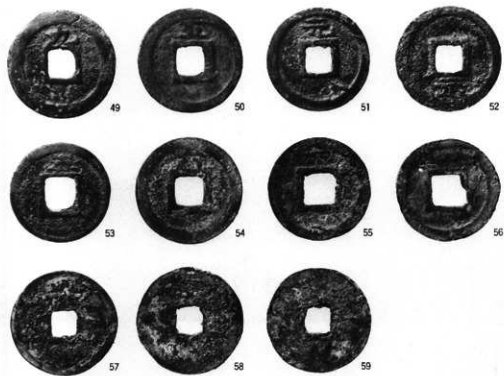
1 出土錢貨 表面



2 裏面



1 出土銭貨 表面



2 裏面



1 調査地周辺航空写真（(南から)1997年7月14日撮影）



2 土塁・暗渠排水口と堀



1 土塚 南北断面一断面1一(東から)



2 土塚 東西断面一断面5一(南から)



1 暗渠細部 (西から)



2 暗渠と下層整地の状況 (北西から)

## 京都市内遺跡発掘調査概報

平成10年度

発行日 平成11年3月31日  
発行 京都市文化市民局  
住所 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488  
編集 朝京都市埋蔵文化財研究所  
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1  
TEL (075) 415-0521  
印刷 真 隆 社